

ではマタイの福音書 6 章 9～13 節。主の祈りが今日のテキストであります。

- 9：だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。御名があがめられますように。
 10：御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。
 11：私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。
 12：私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。
 13：私たちが試みに会わせないで、悪からお救いください。』[国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。]

皆さんにお配りした週報には、文語訳も記してあります。私が幼い頃、教会の日曜学校に通っていたので、毎回『主の祈り』を礼拝で唱え、プログラムの中に組み込まれていて、そして日曜学校でも子供たちは文語訳で言わされたものでした。皆さんも、もしかしたらいろんな教会の出身で、そちらの教会では必ずと言っていい程、礼拝のプログラムの中で全員で『主の祈り』を朗誦する。特に文語訳で朗誦するという習慣をもって、それが身に着いている方も多いと思います。私もですから文語訳でしっかりと身に着いてしまいました。教会から離れた時期もありました。神様に背を向けた時期もありました。でも、この『主の祈り』は、決して離れませんでした。是非皆さんにもこの『主の祈り』をしっかりと覚えて頂きたいと思います。文語訳の方が覚えやすいのかもしれませんが、ですから、是非参考までに週報に記してありますから、「天にまします我らの父よ。願わくは御名をあがめさせたまえ。御国を来たせたまえ。みこころの天になるごとく、地にもなさせたまえ。」まあ、そのようにして文語訳で覚えるのもいいかと思いません。

で、このテキストを見る前に、ルカの福音書 11 章を参照して頂きたいと思います。ルカ 11：1 から

- 1：さて、イエスはある所で祈っておられた。その祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。「主よ。ヨハネが（ヨハネというのはバプテスマのヨハネのことです）弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。」（弟子が「祈りを教えて下さい」。そのリクエストに対して 2 節に）
 2：そこでイエスは、彼らに言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ。御名があがめられますように。御国が来ますように。』
 3：私たちの日ごとの糧を毎日お与えください。
 4：私たちの罪をお赦してください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。私たちが試みに会わせないでください。』

これは、先程お読みしたマタイの 6 章の『主の祈り』とほぼ同じ祈りであります。弟子は「祈りを教えて下さい。」と、イエスにリクエストしました。ここで注意して頂きたいのは、弟子は「説教を教えてください。説教の仕方を教えてください。」とは言いませんでした。または「伝道のやり方。証しの仕方を教えてください。」とは言いませんでした。また「癒し、預言を教えてください。異言を教えてください。悪霊を追い出すことを教えてください。また、奇跡を行うことを教えてください。」とは言わずに、「祈りを教えてください。」とリクエストしました。何故なのでしょう。弟子たちは、イエスのライフスタイル、ミニストリー、その

しの祈りと言ってもいいかと思えます。素晴らしいとりなしの祈りの型です。ただ型にはまった祈りではいけないということです。素晴らしい祈りのパターンですが、パターン化してはいけないということです。パターン化しないためにも、型にはまった祈りにしないためにも、いくつかの注意点も主はあらかじめ教えて下さっております。

6章の9節から『主の祈り』の内容ですが、その前に『だから』という言葉がありますから、前節を受けて『だから』、5節から8節までを読んでみたいと思えますので、目を留めて頂きたいと思えます。『だから』とは、このことを受けています。

5: また、祈るときには、偽善者たちのようであってははいけません。彼らは、人に見られたくて会堂や通りの四つ角に立って祈るのが好きだからです。まことに、あなたがたに告げます。彼らはすでに自分の報いを受け取っているのです。

6: あなたは、祈るときには自分の奥まった部屋に入りなさい。そして、戸をしめて、隠れた所におられるあなたの父に祈りなさい。そうすれば、隠れた所で見ておられるあなたの父が、あなたに報いてくださいます。

7: また、祈るとき、異邦人のように同じことばを、ただくり返してはいけません。彼らはことば数が多ければ聞かれると思っているのです。

8: だから、彼らのまねをしてはいけません。あなたがたの父なる神は、あなたがたが願う先に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。

9: だから、こう祈りなさい。(マタイ 6: 5~9)

今読んだところは、いくつかポイントをまとめてご説明しますと、先ずは偽善的な祈りをしてはならないということ。人の目を引くような、注目を浴びるような、偽善的な祈りをしてはいけない。偽善者という言葉は、ギリシャ語で『ヒポクリテース』"hupokrites"と言って、古代の舞台俳優、特に仮面をかぶって演じる人を指しました。古典劇の役者たちは、皆、仮面をかぶって役になりきって演じた訳ですが、そのような仮面をかぶって演技する者のことを『ヒポクリテース』。私たちは、今、“偽善者”とその言葉を訳して使うわけですが、祈る時には、まるで敬虔な、熱心な、真面目なクリスチャンのように芝居してはいけない、パフォーマンスはダメだ、と言っているわけです。で、密室の祈りも大切だとイエスは言われています。密室の祈りというのは、簡単に言いますと、神様とあなたの、父と子の水入らずの時間、これが本来の祈りのあり方であります。もちろん大勢で、人前で祈ることもあります。注意して頂きたいのは、その場合は偽善的な祈り。人を意識するのではなく、神を意識した祈りに徹する必要があります。ですから、そのように、もしあなたがパフォーマンスのようにして、まるで敬虔なクリスチャンを装って、演じて、人にあなたが如何に素晴らしいクリスチャンであるのか、本当は、実態は違うのに、流麗な、流暢な祈りの言葉を使って、そして人を感心させる、感服させる、「素晴らしい祈りですね」と称賛を受けるような祈りは禁じられているわけです。むしろそのように人からほめられれば、「もう既に人からの報いをあなたは受けてしまっていますよ」と、主は警告しておられます。むしろ私たちが求めるべき報いは、神様からの報いであって、人からの拍手ではありません。あなたはどちらからの、人からの又は神からのどちらからの報いを望むでしょうか。そしてもう一つの点として、異邦人のような祈りは駄目だとあります。異邦人のような祈りというのは、ただ同じ言葉を繰り返すだけの祈り。異邦人というのは、非ユダヤ人のことで、私たちのことも含んでおります。異教徒は、^{とかく}兎角言葉数が多ければ、長く祈れば、それが立派な祈りであって、時間をかけて沢山の言葉を並べて、時間を長くすれば、「自分はよく祈った」と達成感を感じたり、自己満足に陥ったりします。そしてそれらの祈りというのは何の意味も無いんだと。

ただあなたの満足のためだけの祈りであって、祈っている対象の神様は何も感心しないということです。あなたがいくら自分の満足のために、言葉数を並べて長く祈れば、その分神様は感心してくれるだろうなんて思ったら大間違いだということが書いてあります。祈りというのは、時間には全く左右されません。祈りの長さというのは、さほど重要ではありません。勿論長く祈って構わないのですが、祈っている時間が無いような、危機的な事態もあります。ですから、長さではないということです。

で、ここでそのことを踏まえた上で、『だからこう祈りなさい』と。神様はあなたが願う前にあなたの必要を知っておられます。いちいち自分の状況を報告する必要はありません。「神様、今こういう状況になってます。こうなんです。ああなんです。困ってるんです。」とか、いろいろ細かい事を並べて、神様が何にも知らないような、まるで神様が見ておられないような、そんなつもりで祈ることがあるわけですが、そうすると勿論祈りは必然的に長くなります。でも神様は全部知っています。「じゃあ、神様が全部知っているなら、いちいち祈る必要なんかないじゃないか。分かりきっている人に祈ったって何の意味もないじゃないか」と思うかもしれませんが、祈りというものは、”自分の求める答えを頂く”というものではありません。ここを多くの人たちは誤解しております。祈りは”自分の答えを頂く”ということではなくて、祈りは”神様と一つになること、一致すること”です。そのことを今から『主の祈り』から教えられていきたいと思います。「だから、こう祈りなさい。『天にいます私たちの父よ。』」と、先ず祈りの対象が明確化されます。私たちはどなたに対して祈っているのか。既にここで私たちは神様というお方と関係を持っているということに感謝でき、喜ぶことができます。ありとあらゆる人間の必要性の中で、関係というものが、多くを占めているかと思えます。人間関係で悩んでいる人、人間関係が、夫婦の関係が、親子の関係が、又職場の同僚との関係が良ければ、ほとんどの大半の悩みは多分解消されるかと思えます。ここで私たちは、一番大切な関係というものを与えられております。『天にいます私たちの父よ。』と。日本人の多くは危機的な状況になれば、^{わら}藁をもすがる思いで、「神様、仏様。どうか私を助けてください。」神様、仏様というのは勿論神道の神々、^{やおよろず}八百万の神々。また仏教では勿論神はいませんが、仏様ということで、結局祈る対象は何でもいいということです。「誰でもいいから、何でもいいから、藁でもいいから、助けてくれ」と、こういう祈りをするわけですが、それは祈りではなくて、ただの独り言であります。祈りというのは、対象があるわけですが、その対象は生きたお方で、人格のあるお方。このお方はただの人が作り上げた観念ではありません。人が作った神々ではありません。このお方は、父なる神であります。祈りはですから父と子のコミュニケーション、会話、交わりと見ることができます。そして、この父と関係を持つことが先ず必要となるんですけれども、どのように関係を持つのか、持てるのか、これについてはヨハネ 1 : 12 をお読みしたいと思います。これが大前提になります。この『主の祈り』を自分の祈りとしたければ、大前提は先ず父と子の関係を持つということであります。『しかし、この方を受け入れた人々（この方とは勿論イエス・キリストのことです。）、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。』イエスをキリストと信じるならば、あなたは、神の子どもとされる特権を神から頂けます。よってあなたは、神を父と呼ぶことができる、そのような特権的な立場を与えられるわけです。祈りというのは、ですから、神の子どもたちの特権であります。神の子どもとされた者、クリスチャンたちの特権であります。義務ではありません。特権であります。

で、その神は父と呼べるお方で、まさにこの父は私たちのことを我が子のように愛してくださるお方、いとおしく私たちのことを思っていて見てくださいるお方。実際にこの神は、ひとり子イエス・キリストをお与えになるほどに私たち一人一人を愛しておられます。自分のひとり子は、自分のいのちよりも大切なはずであります。一番大事なものを私たちに与えるほどに愛して下さっている。それが私たちの信じる、仰ぎ見る父なる神であります。ですから、この方に何でも祈れることは幸いなことでもあります。とにかく愛されていることは、イエス・キリストの十字架の死を見れば明らかであります。”私たちの父”と呼ぶとき、私

の父”ではなくて、これは弟子たちを、又兄弟姉妹を、神の家族を意識して祈るわけですが、神との縦の関係だけではなくて、横の関係も意識するわけです。縦の関係と横の関係、それはまさに十字架をイメージできるわけですが、常に”私たちの父”と呼びかけるときには、十字架を頭に思い浮かべて、「私は神と縦の関係を持つことができるようにされました。父と子の関係が今与えられていることを感謝します。」感謝できないことがいっぱいあります。つらいことがいっぱいあります。苦しいことがいっぱいあります。でも、私たちは神との関係がなければ、もっとつらい状況になったということを忘れてはいけません。神を知らない人は、目的も無く、意味も無く、むなしく人生を終えて、そして死んだらもうその先に待っているのは、永遠の滅びというもの、いわゆる地獄というところです。私たちはその地獄から、永遠の滅びから解放されました、救い出されたわけです。縦の関係を思うときに私たちは、先ず自分が抱えている、直面している問題についても、心が本当に落ち着くような状態ですね。解放されて、私はもっと大変なところから救われてきたではないか。今現実に確かに厳しい状況はあるけれども、地獄より厳しいところは、つらいところは、恐ろしいところは他にあるだろうか。そして私たちには、横の関係も与えられているではないか。私たちには、兄弟・姉妹が与えられているではないか。これも感謝なことです。ですから、もう既に私たちの父と呼びかけるだけで、ほとんどの問題は解決したと言って良いと思います。

で、次にテキストの方に目を戻して頂いて、マタイ6:9に、『御名があがめられますように。』聖書で”御名”、名前というのは、全てその人の人となり、性質、性格、人格、又は力、権威を表しております。それがあがめられますように。これは、“ほめたたえられるように”、“賛美されるように”と読めてしまうと思うんですが、実際にこの“あがめる”という言葉は、直訳すると“きよめられますように”というものであります。神の御名がきよめられる。きよい神様の名前がきよめられるとは、一体どういうことなのか。神様の名前は、きよめられる必要があるのでしょうか。勿論きよい神様が、その人格においても、性格においても、権威や力においても、きよいお方であるわけですから、きよめられる必要は無いんですが、ただ私たちの側で勝手に神様の性質を汚れたものにしてしまう。勝手なイメージで神様はこういう神だ。実際に“きよい”という言葉は、もっと突き詰めていきますと、字義通りには、原義というものは、『分ける、区別する、区分けする』という言葉から来ています。ですから専門用語では、この『分ける』という言葉は、『きよい』という言葉は、『聖別』というふうに訳されます。『聖書』の“聖”に“別”と書いて、『聖別』。“聖め別つ”ということなんですが、私たちの神観、神様に対するイメージというのは一体どんなものなのでしょうか。その名前というのは、性質、性格、人格、力や権威と言いましたけれども、私たちは神様のことを勝手にイメージして、勝手な神観、神像、いわゆるこれが偶像という、偶像化するという行為なんですけれども、まるで私たちと同じ人間かのように、まるでこの世の神々かのようにして、人間の作った宗教の神であるかのようにして、聖書の神を勝手に想像して、そして自分の都合や好みに合わせた神観を持って私たちが祈るならば、それは祈りには勿論なりませんので、先ず『御名があがめられますように。』私たちの間違った、聖書から外れた、聖書的でない神観をきよめていただけるように。そうすることで神がどのようなお方なのか。勝手なイメージで作上げた神ではなくて、本当に聖書に即した“イエス・キリストのお父さん”という神を見ることが出来ます。ですからここでは自分勝手なイメージに神を仕立て上げないということ。この世の神々と、まるでアラジン魔法のランプのような神様、何でも言うことを聞いてくれる、サンタクロースのような神様、プレゼントを運んでくれるような、そんな神を私たちは勝手にイメージして、まるでご利益の神のようにして神様を取り扱い、そして祈る時には、自分の願いを並べ立てて要求する、強要する。「神様こたえて下さい。」言葉遣いは丁寧かもしれませんが、内心は神様に要求をすると。神様は、やはり神様であります。父なる神とは呼ばれていますが、この方は、“天にいます父”であります。地上の父、地上の神々とは違うということです。完璧なお方であり、主の主、王の王、そして全知全能の神でもあります。聖なる神であり、義なる神であり、私たちとはかけ離れた存在

です。でもそのかけ離れたお方が、イエス・キリストによって私たちの親しい父というふうな関係を持って下さるわけです。慈愛に満ちた父となって下さるわけですが、でも気を付けなければいけないのは、勝手なイメージを作り上げてしまうということ。自分の肉の地上のお父さんと同じように、神様を見てはいけません。「私のお父さんは冷たかった。厳しかった。欲しいものを下さらなかった。優しい言葉をかけて下さらなかった。私をいつも愛してるよと言って、しっかりと抱きしめてくれなかった。私の間違いをいつも指摘して、そして私を罰して決して赦してくれなかった。私を一人の人間として、人格者として見てくれなかった。だから神様もそんな神様だ。」というふうには思ってはいけないということです。天の父には私たちはしっかりとした聖書のガイドラインがありますので、また聖書の説く神観というのがあります。加えてイエス・キリストが、この目に見えない父なる神様を私たちに分かりやすく表して下さいましたから、この『あがめられますように』、『きよめられますように』というのは、イエス・キリストを見るならば、父がどんなお方なのかは一目瞭然ということでもあります。実際ヨハネの福音書に、このように書いてあります。ヨハネ 1:18 に『いまだかつて神を見た者はいない。父のふところにおられるひとり子の神が（これはイエス・キリストのことです。）、神を説き明かされたのである。』と。聖書を通して真の神とはどんなお方なのか、天の父とはどのような父なのか、又イエス・キリストを通してこの目に見えない神様のことを私たちは教えられます。正しく神を知ることが出来るということです。で、この方は天におられますから混同してはいけません。親しい仲にも礼儀ありとありますね。『愛は礼儀に反することをせず』という言葉もあります。伝道者 5:2 にもこう書いてあります。『神の前では、軽々しく、心あせってことばを出すな。神は天におられ、あなたは地にいるからだ。だから、ことばを少なくせよ。』と。親しい仲にも礼儀ありであります。いくら天のお父さん、天のお父ちゃん、天のパパと思ってもですね、何でも好き勝手なことを並び立てていいわけじゃありません。ちゃんと礼儀を分け前なければいけません。このお方は私たちとは違って、聖なるお方、義なるお方、愛に満ちたお方ありますけれども、畏敬の念を持って、畏怖の念を持って、恐れなければいけません。愛には礼儀も含まれているということも忘れてはいけません。

次に、またテキストに戻って頂きまして、今度はマタイ 6:10 です。『御国が来ますように。みこころが天で行われるように地でも行われますように。』”御国 “という言葉は、これは「支配・王国」と訳される言葉です。神様の支配がやって来ますように。神様の王国がもたらされますように。そして、『みこころが』これは神様の意思、神の願い、それが『天で行われるように地でも行われますように。』という祈りです。「神の王国が来ますように。神のみこころが行われますように。」地上には大きく分けて2種類の人が存在しております。1種類目は「神の国が来ますように。神のみこころが行われますように。」と祈る人たちと、もう一つのグループは「自分の王国が来ますように。自分の心が行われますように。自分の願い、自分の意思、自分の願望が実現しますように。」という自己実現しか考えない人たち。その二者が存在いたします。「神の王国が来ますように。」という人と、「自分の王国が来ますように。」という人。「神のみこころが行われますように。」という人と、「自分の心が、自分の意思が、貫徹されるように。夢が叶うように。願望が叶うように。」と、自己実現を目指す人たち。その2種類に分かれるかと思います。神様は極めて公平な方、フェアな方です。どういうことかと言いますと、私たちに自由意志を与えておられます。ですから、「神の国が来ますように。神のみこころが行われますように。」と私たちに祈ることは勿論出来ます。許されてます。でも同時に自由意志が与えられてますから、そう祈らなくても、自分の国が来るように。自分の王国が樹立されるように。自分の思い通りに好き勝手にできる状態になるように。自分の夢や願いが叶う。フランク・シナトラが歌ったような” My way “ですね。もう我が道を行くと。「神などいない。自分が神だ。自分のやりたいように。自分の支配で。自分のコントロールで、好きなように、思い通りにやってきたい。」ということも神様はお許しになります。その意味において神はフェアな方、公平な方ということです。私たちの自由意思を尊重される方。無理やり私たちに強制的に縛り上げて、やりた

くもないことを、願ってもないことを、強要するということはないということです。「神など要らない」と言えば、残念なことに、神様は勿論ひとり子イエス・キリストを与えているのに、それを要らないと言えば、残された道は永遠の滅びです。『**神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。**』と。ヨハネ 3:16 の言葉ですが、この御子を、最高のプレゼントを要らない。自分は自分のやりたいようにやっていくんだ。神なんか要らない。と言えば、勿論残された道は、永遠の命ではなくて、永遠の滅びしかありません。自滅の道、破滅の道、My way を行くといえば、その先には死が待っているだけです。ただの肉体の死ではありません。永遠の死であります。イエスは、『**わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。**』とおっしゃいました。イエスの道を求めるのか。イエスを道としているのか。自分の道を求めていくのか。イエスを道と信じる者は、どうなるのか。『**わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。**』とヨハネ 14:6 の言葉ですが、イエスを道とするならば必ず天の父のところに行くことが出来ます。イエスを通して私たちは神と、父と子の関係を持つことが出来ますが、イエスを抜きにして、My way を行けば絶対にそこには行けません。父なる神様との関係は持てないということです。ですから私たちは、神様が今自由意志を与えて下さって、「神の御国が、王国が、支配が来ますように。神様のみこころが行われますように。』『**天で行われるように地でも行われますように。**』とありますが、天では邪魔するものはありませんが、地上には邪魔するものがいっぱいあります。神のみこころが行われなように邪魔するもの。それが何か、皆さんご存知だと思いますが、それが聖書が言うところの、神の敵、悪いもの、悪魔、サタンと呼ばれるものでありますが、それと別に実は私たち人間も、罪人も神のみこころを嫌って、自分の心を行う者でありますから、そのような私たちに対して神の支配が来れば、神のみこころが行われれば、私たちはそれがベストである、最善である。自分の王国や、自分の心を行えば、皆さんもそう試みて経験上それが実に虚しいということを知っているかもしれません。それが実に破滅的で悲惨なものだということを皆さんは経験上知っているかもしれません。「自分の思い通りにやったら幸せになれる。自分の力を誇示できれば、自分は満足できる。」本当にそうなったでしょうか。本当にそれであなたは幸福になったでしょうか。多分そうじゃないと思います。皆さんはそれを経験である程度理解しておられるかと思いますが、それが続けばどうなるのかは、死んでから神の前に立つことになった時には、もう認めざるを得ない状態になると思います。ですから神様は、あなたの支配ではなくて、あなたの心ではなくて、あなたの道ではなくて、主の支配、主がコントロールして下さる人生。本当に楽です。自分で心配しなくていいんです。「どうしよう。困ったな。お父さんに相談しよう。」それで終わりです。全然悩む必要がありません。「食べる物がなくなってしまった。来月の支払いはどうしよう。自分でなんとかしなきゃ。」じゃないんです。神様に「あなたは私の父です。あなたは私のお父さんですから、子供の私の必要をすべてご存知です。あなたは何一つ差し控えるようなケチなお方ではありません。ひとり子さえも与えて下さったあなたですから、どうか私の必要を満たして下さい。」それで終わります。神の支配、コントロールがあれば、私たちには平安があります。私たちには満たしがあります。幸福が訪れます。ですからここで祈りというのは、「^{とかく}兎角いわゆる願掛けのように自分の願いや思いをただ神様に押し付けて思い通りにしてもらいたい。」それが祈りではないということです。必要や願い事をただまくし立てることが祈りではないということです。長く祈って、お布施を沢山支払って、そして苦行して修行したら、神様が私に目を留めてくれて、その努力を認めて応えてくれる、祝福してくれる。そのように思うのは、これは異邦人・異教徒のメンタリティーであります。私たちの神様はお父さんですから、そんなことをしなくたって喜んであなたに良くして下さいます。あなたも親であるならば、お父さんであるならば分かります。子供があなたから何かを、祝福をもらうために、一生懸命努力してそして犠牲を払って、あなたに一生懸命小遣いをあげて、そしてあなたの肩を揉んだり、そしてあなたに優しい言葉をかけたり、家の手伝いをしたりして。そうし

なければお父さんから、お母さんから、何か良くしてもらえないという親子の関係であるならば、それはもはや愛情に満ちた親子の関係というよりも、それは主人と奴隷の関係と言っていいと思います。それは私たちの神との関係とも違います。父なる神ですから、私たちがたとえどんな者であろうと、イエス・キリストにおいては、私たちはすべての罪が赦されている。弱さも何もかもすべてご存知の上で、私たちはこの神に受け入れられた者であります。「頑張らなければ、自分をきよくしなければ、敬虔なクリスチャンにならなければ、熱心にやらなければ神様は見向きもしてくれない、祝福も下さらない」ということではありません。

で、11節を見て下さい。『私たちの日ごとの糧をきょうもお与えください。』ここでも“私たち”が使われています。“私の”ではありません。“私たち”。自己中心ではないんですね。私が今必要と覚えていることは、他の兄弟も他の姉妹も、きっと必要を覚えているだろう。利己心ではなくて、自分が必要を感じたら、自分が痛みを感じたら、自分が悲しいと思ったら、他の兄弟も他の姉妹も、自分と同じ思いをしているに違いない。そこから祈るんですね。とりなしていくわけです。『何事でも、自分にしてもらいたいことは、ほかの人にもそのようにしなさい。』と。これも聖書に書かれている言葉、**マタイ 7:12** の黄金律と言われる有名な箇所です。”Golden Rule”と英語で言います。自分にしてもらいたい。『日ごとの糧をきょうも与えて下さい。』“私の”ではなくて、“私たちの”です。で、この『糧』というのは文字通りは“パン”という言葉です。当時イエスの時代、パンが主食だったわけです。毎日食べるものです。ですから今日本人で言えば、ご飯、お米でもラーメンでも何でもいいですが、主食であります。で、『日ごと』というところも、これは“毎日”という言葉ですが、『日ごと』という言葉が大事であります。“毎月の”じゃありません。「毎月の必要を、月給をちゃんとください。」ではないんですね。“毎年の”でもありません。また“一生の”ではありません。“毎日”ですから、この主の祈りは必然的に毎日祈るべき祈りということになります。「1ヶ月に1回だけの、毎月の糧を与えて下さい。」ではありません。毎年の糧であつたら、多分私たちはお正月にならないと祈らないかもしれません。ここでは、神様は私たちに毎日祈るよう求めておられます。「神様って、随分エゴイストですね。」と、思うかもしれません。まるで呼び出して来るような。「私たちが必要なんですか、神様は。そんなに寂しいんですか。そんなに祈って欲しいんですか」と。誤解しないで下さい。そうではなくて、私たちがこの天の父を必要とするからです。だから『日ごとの糧をきょうもお与えください。』とあなたがたは祈りなさいと。「神が私たちを必要としている。神が私たちの祈りを必要としている」のではなくて、寂しいからではなくて、エゴイストだからではなくて、私たちがこの天の父を毎日必要とするから、あなたは毎日祈りなさいと言ってるわけです。日々信頼して毎日祈りなさい。そしてこの“パン”というのは、イエス・キリストご自身に当てはめて、『わたしはいのちのパンです。』とおっしゃいました。目に見える“物理的なパン”も必要ですが、しかし目に見えない“いのちのパン”がすべてを満たします。ヨハネ 6:35 にこう書いてあります。『イエスは言われた。「わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません。』イエス・キリストがいのちのパンです。イエスが私たちの糧となって下さる。イエスが私たちの毎日の必要となって下さる。「イエスのもとに来れば、決して飢えることも渴くこともない」とあります。これは勿論肉体的な意味においても、感情的な意味においても、精神的な意味においても、霊的な意味においても、飢え渴くことはないということです。イエスは私たちの必要そのものとなって下さるということです。で、もう一箇所、**ピリピ 4:19** も拝読させていただきます。『また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください。』イエス・キリストのうちにすべてがあるんです。あなたが今必要としているものは、すべてイエス・キリストのうちに見出すことが出来ます。「神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」と。これも有名な言葉で『山上の垂訓』にあります。**マタイ 6:33** の言葉

です。「神の国と（神様の支配と）その義（義とは神様との正しい関係です。それを）まず第一に求めれば、そうすれば、それに加えて、これらのも（文脈上これらのというのは日常生活に関わる必要です。衣・食・住です。着るものも、食べるものも、住むことも、すべて備えられる。）これも皆さんはクリスチャンになって既に信仰歴が何年かあれば、この言葉は真理だということをきっと体験していると思います。「確かに最初は信じられなかった。神の国とその義をまず第一に求めたら、どうして着るものも、食べるものも、住むことも何もかもが満たされるのか。分かりません。」と。本当にそんなこと起こるんでしょうかと。半信半疑だったかもしれませんが、でもこの言葉を信じるようになってから、イエスが本当に私のいのちのパンなんだと。必要すべてなんだということを信じてみると、経験して、本当に聖書の言う通りだったということが分かってきます。経験を通して**マタイ 6 : 33** は本当なんだと。神の国とその義とをまず第一に求めたら、本当に私の物理的な、肉体的な、感情的な、精神的な必要は本当に満たされるんだということを経験的に知ることが出来ます。

で、もう一つ忘れてはならないのは、私たちの天の父は、私たちのすべての必要を知っているだけでなく、備えて下さるということです。**マタイ 6 : 8**には『あなたがたが願う前に、あなたがたに必要なものを知っておられるからです。』とお父さんは子供の必要を知っています。「車が欲しい」3歳の子供が言います。勿論お父さんはミニカーをあげるわけですが、でも3歳の子供が「本物の車が欲しい。運転したいんだ」と言っても、お父さんは勿論あげません。それは必要ではないからです。大きくなったら、免許もとったら、ひょっとしたらお父さんからプレゼントされるかもしれませんが、でも免許もない年端もいかない3歳の子供が「本物の車が欲しい。運転したいんだ」なんてことを言っても、「それが欲しい、欲しい」といくら駄々をこねても、勿論お父さんはあげません。子供の要求通り、願い通りにはあげません。父なる神はすべての必要を知っています。ですから祈っても応えられない時が確かにありますが、多くの場合私たちには必要ではないからであります。または本当に神様を信頼することを教えて下さるための敢えて訓練という意味合いで、待つように、「わたしを信頼して待つように。そのタイミングを待つように。3歳の時点ではまだ必要ない。でもあなたが18歳になったら必要になるかもしれない。だから待つように。」そのような祈りがあるわけです。応えられ方があるわけです。

次にテキストに戻って頂いて**12節**に『私たちの負いめをお赦してください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』これはまさに肉体的な必要、物理的な必要に続く、霊の必要であります。一言で言えば、『赦しの必要』ということです。これも勿論いのちのパンであるイエス・キリストのうちにすべて発見できる必要の満たしであります。日ごとの糧、パンだけでなく、人は罪の赦しなくしては生きていけません。罪悪感、罪責感を抱えたままでは、人はいけないんです。常に後ろめたさがあり、常に虚しさがあり、常に不安があります。ここで『私たちの負いめをお赦してください。』で終わらずに『私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』とあるように、これは神にある罪の赦しと他の人々を赦すということが結びついております。罪赦された者として、他の人たちを赦していく恵みへと広がっていくことがここに説かれています。神に赦された者として、私たちも神のように、父なる神のように人を赦すことを選択していく。赦すことを選んでいく人生。これが本当に祝福された人生です。赦せないという思い。

「絶対にあいつだけは赦せない」そのような苦々しい恨みつらみは、必ずその人を蝕んでいきます。あなたが赦せないと思っている相手は、あなたのことなんか何にも気に留めていません。多分あなたのことなんか忘れていていると思います。でもあなたは「赦せない、赦せない」と思って常にその人のことを年がら年中思ってるわけです。虚しいだけです。相手は全然あなたのことなんか意に介していないのに、あなたはいつまでもその人のことを覚えて、いつまでもあの時の出来事、あの過去のあの振る舞い、あの言動をいつまでも覚えている。虚しいですね。それらはあなたを苦しめるだけです。苦々しい思いは、恨みは、^{つら}辛みは、憎しみは、あなたを蝕んでいきます。あなたを破壊するものであります。あなたは気が付いてみたら、

苦々しい人間に成り下がってしまいます。だから赦すことを選んで欲しい。赦せないという縛りから解放されて欲しい。それが父のみこころであります。人を赦したら、相手を赦したら、何か損するような気がするかもしれない。それはあなたの思い込みであります。実際に赦してみてください。その時の解放感、自由は、何にも代え難い体験となると思います。今までどうしても赦せなかった。縛られていたわけです。でも、赦すということを選んだ瞬間にあなたは解放されます。こんな解放感は今まで経験したことがなかったというほどに、あなたは自由になります。平安が与えられます。誤解してはいけないのが、互いに赦し合うことが神の赦しに与^{あずか}る根拠にはならないということです。このマタイ6章の『主の祈り』のすぐ後に、14節を見て下さい。『もし人の罪を赦すなら、あなたがたの天の父もあなたがたを赦してください。』15節に『しかし、人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪をお赦しになりません。』6章14、15節。互いに赦し合う必要こそがこの主の祈りの強調点だということも分かりますね。主の祈りのすぐ後に互いに赦し合うことがもう一度語られております。神の赦し、言い換えれば神の救いと言ってもいいかもしれません。この神の赦し、神の救いの恵みに与る者はお互いに赦し合うということを実践すべきであって、勿論誤解してはいけないのは、お互いに赦し合うことが神の赦しに与るということではなくて、既に私たちはイエス・キリストの十字架の完璧な完了された贖いによって、赦された者ですから、赦された者として赦す。赦された者として、赦し合うということです。「人を赦さないなら、あなたがたの父もあなたがたの罪を赦さない」というのは、これは赦さない霊があるならば、赦さないスピリット”spirit”があるならば、「どうしてもあいつだけは」という苦々しい思い、恨みつらみが、憎しみがあるならば、あなたがいくら祈ってもその祈りは聞かれないということです。赦しないと神に対するあなたの祈りは必ず妨げられます。ですから兄弟に対して、姉妹に対して、恨みを抱いたままでは神の前に出ることは出来ないと、この山上の垂訓の中でイエスは教えておられます。この赦しが主の祈りの中では最も強調されております。最も強調されているということは、一番私たちにとって大きな課題となること、一番の問題となること、一番の必要となるということです。この中の全員は、この赦しの問題について他人事とは思えないと思います。「本当に私はもうなんの柵^{しがらみ}もありません。すべての人を赦せています。」と言う人はこの中には一人もないかもしれません。どこかでは引っかかったまま。忘れられない。あの時のあの言葉が、あの顔が、あの表情が、あんな仕打ちが。忘れかけたのにまた思い起こされたり、いろいろあるわけですが、時間がすべてを洗い流すわけではありません。忘れさせてくれるわけではありません。同じようなことがあるたびに思い起こします。ですから今、今朝、是非この主の祈りを自分の祈りとして祈って欲しいと思います。『私たちの負いめをお赦しください。私たちも、私たちに負いめのある人たちを赦しました。』と。赦す選択をして下さい。そして、「これから赦そうと思います」ではなくて、ここには『赦しました』という実践が伴っています。「赦せるように」と私たちは祈るかもしれませんが、そういう祈りは勧められません。主の祈りは『赦しました』です。「赦せるように助けて下さい。」なんて祈りをしてるうちは、多分あなたは一生赦さないと思います。赦しはあなたの選択です。チョイスです。あなたの意思で赦すことを選ぶのです。そうすれば主が必ず豊かに応えて下さいます。この赦しこそが実はキリスト教の最大の特徴なんです。クリスチャンの最大の特徴は、赦しです。有名なC・S・ルイスという人は、ある学会で、この人はオックスフォードの教授でもあった方で、神を信じる前は無神論者・不可知論者であったんですが、後にキリスト教の弁証者となり、ナルニア国物語などを書いた人ですが、この人が「キリスト教の特徴とは何か。他の宗教との一番の違いは何か。」というような議論の中で、「キリスト教の特徴とは一言で罪を赦すということ。」的を射ていると思います。「クリスチャンであるとは、赦し難い人々を赦すことである。神があなたの方の中にある赦し難いものを赦して下さったからである」とC・S・ルイスは述べてます。クリスチャンであるとは赦し難い人々を赦すことである。赦し難い人々を赦していない人は、逆に言うとクリスチャンとは言えないということです。神があなたの中にある、私の中にある赦し難いも

のを赦してくださったからだという根拠が付いています。あなたのような者が赦されたんです。であるならば、あの人のことも赦せるでしょう。「いや、私はあの人よりもよっぽど立派だ。よっぽどの人格者だ。まともなんだ」と。本当にそうでしょうか。あなたの罪がイエス・キリストを十字架に磔はりつけにしたんです。あんなおぞましい、人間とは判別つかないような血まみれのボロボロの姿にしたのは私たちの罪であります。それが私たちの本来受けるべき罪の罰であり、それが本来私たちの姿であるわけですから、赦し難い者が赦されたわけです。ですから、人の中にある赦し難いものも、赦し難い人々も赦すことができます。

で、次に13節に『**私たちに試みに会わせないで、悪からお救いください。**』試みに会わせないで、『試み』というのは、“試練”ということです。神様は私たちを誘惑する方ではないとヤコブ1章にあります。テストと言って良いと思います。テストに会わせないで下さい。でも聖書には、「試練に会うということは幸いなことじゃないですか。試練に会うことで忍耐が培われて、完全な人として認められるじゃないですか。」同じヤコブの手紙1章に書いてあります。またペテロは、第1ペテロの中で「信仰の試練というのは、これは火で精錬されて朽ちていく金よりも尊いことじゃないか。試練に会うことをむしろ喜びなさい。キリストの苦しみに与れるのですから。試練を喜びなさい。そう書いてあるじゃないですか。」なのに、それにもかかわらず「試みに会わせないで、テストに会わせないで、試練に会わせないで下さい」というのは、矛盾するじゃないですかと思うかもしれませんが、実際には矛盾ではなくて、正直に私たちは「試みに、テストに会わせないで下さい」と謙遜になって祈る必要があるわけです。逆に私たちが、「私をテストして下さい」と。「私はもうちゃんとした強いクリスチャンですから、テストして下さい。」これは実に高慢な姿勢であります。ですから「試みに会わせないで」というのは、確かに試みは信仰を試し、信仰を精錬し、イエス・キリストの苦しみに与る素晴らしい機会にも使われます。でも私たちは謙遜にへりくだって、「自分をテストしてくれ」というふうな傲慢な姿勢で神様に臨んではいけません。もし神様がそのうえでのテストを与えるならば、試練を与えるならば、それはまた喜んで受けるわけです。私たちは「試みに会わせないで欲しい」と、謙遜に祈るべきです。「私はそんなに強い人間ではありません」と。ただ、なおそう祈っても主が試練を与えるならば、試みを与えるならば、その時には喜んで受けます。神は試練とともに脱出の道も備えて下さることを私たちは神の約束で知っているからです。第1コリント10:13にある言葉です。神は試練とともに脱出の道も備えてくださっていると。

で、『悪からお救いください。』とありますけれども、この“悪”というのは勿論、悪い者、敵、サタン、悪魔のことです。悪魔は祈りを最も恐れます。祈りを最も嫌います。祈らせないようにとにかくサタンは働きます。サムエル・チャドウィックという人が「祈り以外にサタンの恐れるものはない」と言っています。

「キリストを見失った教会は、善行は様々に行う。活動は盛んにするが、御言葉を黙想することがない。組織は充実しているが、祈りが無い魂は悪しき道にさまようのは勿論、善行の中でも失われていくであろう。サタンの関心事は聖徒を祈りから遠ざけることである。祈りを欠いた研究も、祈りのない善行も、祈らない宗教も等しくサタンの恐れるところではない。サタンは我々の努力を笑い、知恵をあざける。しかし我々が祈る時、サタンは震え上がる。」という言葉はサムエル・チャドウィックという、これも有名なメソジスト教会のリーダーでありますけれども、そのようにして「悪いものから守って下さい。」これも祈りによって守られ、祈りによって勝利されます。

最後に、『**国と力と栄えは、とこしえにあなたのものだからです。アーメン。**』とありますが、これはいわゆる神をほめたたえる、礼拝する、賛美する、頌栄と呼ばれる部分です。ここまで見てきた祈りをもう一度振り返ると、最後に私たちは結局もう頌栄せざるを得なくなるわけです。神をほめたたえざるを得なくなるわけです。私たちの神はお父さんである。そしてこのお父さんは私たちのすべての必要を満たして下さい。そして守っても下さる。そして、最後にはこの神をほめたたえざるを得ない。この神は私たちの礼拝を受けるにふさわしい神であると。ここで言われている『**国と力と栄えは**』すべて神のものであると

ということ。支配と神の力ですね。で、すべての栄、栄光は、すべて主に帰せられるということ。

最後にここまで来ましたので、一言付け加えておきたいと思いますが、英語に『エクスタシー』”ecstasy”という言葉があります。和製英語でも使います。エクスタシーというのは、忘我の境地、有頂天になっている状態です。もう天にも上る思い、エクスタシーと言います。エクスタシーを味わいたい。悪い意味ではなくて、いやらしい意味ではなくて、本当に素晴らしい我を忘れてしまうような、夢心地の体験をしたいと誰もが人間であれば思うわけですが、エクスタシーの“エク”というのは、『外にでる。外に立つ。』という言葉。“タシス”というのは『自分自身』という言葉です。すなわちエクスタシーの原義というのは、自分自身の外に出ること、自分自身の外に立つということ。何となくイメージ出来たと思います。日本語ではそれを文字通り『忘我』というわけです。“忘れる我”と書いて忘我というわけです。それが“有頂天”、まるで天に上ったかのような気分。この頌栄はまるで天に上ったかのような気分です。天国に行ったら私たちは何をするのか。たった一つのことしかしません。それは『頌栄』です。礼拝、賛美だけです。なぜならば、そこには神しかいないからです。永遠にこの神をほめたたえる。それが最高の祝福である。天国の祝福というのは礼拝の祝福なんです。礼拝の中に私たちは、エクスタシーを体験できます。我を忘れて有頂天になって、文字通り天国を味わい、それがこの主の祈りの最後の結論であります。あなたのすべての必要も、痛みも、悩みも、苦しきも、最後のこの礼拝によってすべて忘れ去られて、人を赦せなかったあの苦々しい思いも忘れ去られて、忘我の境地に至る。有頂天の境地、エクスタシーに入ることが出来ます。これが私たちが主によって、父なる神様によって与えられる素晴らしい祈りであり、約束であります。今日はこれで終わりたいと思いますが、是非主の祈りをもう少し時間をかけて学びたいという方は、一つひとつ、山上の垂訓5章から7章までありますが、また個人的に祈って、学んだだけじゃなくて、これは毎日祈って実践していくものでもあります。自分の祈りとして欲しいと思います。そしてこれを一生の学びとして欲しいと思います。祈りを教えて下さい。祈りを学びたいければ、主の祈りから始めて欲しいと思います。では、ここで終わりたいと思います。